
桃色の悪魔

CROW

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桃色の悪魔

【Nコード】

N4725BA

【作者名】

CROW

【あらすじ】

悪魔が棲む世界を治める王の側近つぐもまこと九十九真の娘とうか桃香は優れた才能を持っていて父からも一目置かれていた。

しかし彼女を陰で妬んでいた弟の翔しょうによって無実の罪を着せられ、捕まりかけたが、彼女の伯父の結樹ゆうきの手より助けられ、人間界へと送られる。

そして日本のとある高校に通う事になった。

第1話

とある場所にある悪魔が治める世界

王の城の5階の寝室

？「ふぁ、もう寝ようっと」

豪華なベッドで桃色のネグリジェを着た桃色のセミロングの少女が眠りに就こうとしていた。

？

男「寝たか、もうすぐ行くぞ」

そして別室でその様子を監視する者が居た。彼は彼女の弟だった。

寝室

男2「おい、起きろ桃香」

ツンツンした黒い髪の男が彼女を起こそうとしていた。

その少女の名は九十九桃香^{つくもとうか}で世界を治める王の側近九十九真（一まこと）の娘だった。

桃「結樹おじさん、どうしてこんなところに？まさか襲いに」

彼女はジト目で彼にそう言った。

結「違う、おいそんな目で見るな」

彼は伯父の九十九結樹（一ゆうき）で彼女によくちよっかいをかけてボコボコににされたりしていた。しかし不治の病でいつ死んでもおかしくなかった。彼女はそのことを知らない。

結「誰かがお前を貶めようとしてる」

彼は真剣な顔でそう言った。

桃「一体誰がそんなことを」

結「お前の弟翔^{しょう}だ、ずっとお前を妬んでいた」

才能に恵まれていた彼女は弟にずっと陰で嫉妬されていた。

突然ドーン！という音と共に黒い扉が吹き飛んだ。そして魔力で強化した弾を打つ銃を持った10人の黒いスーツを着た男達が来た。

男「九十九桃香！王の命により王暗殺を企てた罪で拘束する」

桃「私、そんなの知らない」

男「証拠がある」

結「行くぞ（持つか俺）」

彼は彼女を布団から出し、お姫様抱っこして窓を突き破り蝙蝠みたいな羽を広げ飛んだ。

男「裏切り者め」

彼らも同じように羽を出し追いかけた。

？

男「糞、あいつ裏切ったな」

彼は裏切られた悔しさのあまり机を右手で強く叩いた。

そして2人はある場所に来た。地面には魔法陣が書いてあった。

結「チッもうすぐ奴らが来る（まだだ、まだ死ねるか）」

桃「これは」

結「お前は逃げろ、行先は人間界だ、俺が使っていた家と資金も用意してある」

彼は翔に協力するふりをしながらずっと彼の事をずっと調べていた、そしてもしもの時に備え彼女を逃がす準備をしていた。

そして彼女を魔法陣の中に入れ何かを唱えた。その後すぐ魔法陣が光り出した。

男「まさか貴様」

そして彼らが一斉に銃を打った。

結「こいつだけは絶対に守る（頼む、もう少しだけ頑張ってくれ、あの笑顔を守るために）」

そして彼は全ての弾を魔法で止めた。

桃「伯父さん！？」

結「俺は不治の病だ、もう終わりだ、さようなら桃香、それと鍵だ」
そして家の鍵を渡すと彼の体が黒い靄になって消えた。それと同時に彼女は転送された。

第2話

日本のとある住宅街

彼女は彼が用意した2階建てのクリーム色の家の前に居た。深夜2時を過ぎていたので辺りは静まり返っていた。

桃「此処が人間界」

家の表札には「九十九」と書いてあった。庭は無く、塀は打ちっぱなしのコンクリートで出来ていた。

桃「これがカギね」

そして鍵を開けて中に入った。そして鍵を閉めた。

桃「意外と埃っぽくない」

部屋は和風と洋風が合わさっていた。結樹は魔法で綺麗な状態を保っていた。

そして居間は畳で6帖くらいの広さで20インチの薄型テレビがあって半径が50センチの円形の脚の短いテーブルがあった。あと、白いエアコンが付いていた。

桃「本？」

テーブルには黒くて厚さが2センチでA4サイズの本があった。

桃「（何々、「人間界で暮らすにあたっての必要事項・日本編」）」
それには日本のことについて詳しく書いてあった。

桃「（さて、読もうか）」

彼女は本を読むスピードが速くなる眼鏡を掛けそれを読み始めた。

桃「（えっと通貨の単位は円で・・・・・・・・義務教育が9年・・・・）」

少女読書中・・・・・・・・

3時間後

桃「最後のページね」

最後のページには彼が書いた文章が載っていて貯金通帳が挟まっていた。

「桃香へ

これを読むときには多分俺は生きていないと思う・・・・・・・・今日家の近くの高等学校に編入する手続きを済ましてあるから明日からそこへ行ける、お前ならうまくやっていけるはずだ。後銀行の口座と居間のに俺が今までに集めた金がある。・・・・2階にお前の寝室兼部屋がある・・・・・・・・

九十九結樹

桃「伯父さん、此処まで私のことを」

彼女は静かに泣いた。涙で書いてある文字が滲んだ。

数分後泣き止んだ彼女は2階へ上がって行った

寝室には木製の机と桃色のセミダブルのベッドがあり、桃色のカーペットが敷いてあって、服が入った

引き出しが5つの黒い筆筒が窓の隣に置いてあった。そしてベッドの上にたたんでいない制服が置いてあった。

上着は紺色でスカートはベージュのプリーツスカートで赤いリボンが首元に付いてあった。ボタンは金色で桜の花が彫ってあった。

桃「ふああ、もう寝よう」

彼女は制服を近くにあったハンガーに掛け、ベッドに入った。

桃「（枕までちゃんとサイズを合わせてくれたの）」

そして彼女は数分で眠りに落ちた。

第3話

俺は天野一輝^{あまのかずひ}、高校生2年で17歳白い髪が特徴だった。俺は不思議な点が沢山あった。

一つは血液型がこれまでにない珍しい型で、背中の肩甲骨辺りには小さな羽の形をした痣があったが中学生の時、手術で消してもらった。そして他人のオーラが見えるのだった。

学校、彼の教室

俺のクラスは30人で担任が数学教師の山元という黒い眼鏡を掛けた女性教師だった。そして今はホームルーム中だった。

山「転校生を紹介する、入って来て九十九さん」

そしてドアが開き、桃色の髪の美少女が入って来た。オーラは赤黒くとても禍々しかった。なんだコレこいつ人間か？

桃「九十九桃香です、これからよろしくお願いします（窓際の人本当に人間？）」

女子「ボソ（凄く綺麗だね）」

女子2「（お姫様みたい）」

俺の後ろの二人の女子生徒が話していた。そして俺の隣の平野が聞いて来た。

平「おい、あいつ何色だ」

「今まで見たこと無い色だ」

平「どんな色」

「赤黒かった、本当に人間か」

平「何だよそれ珍しいな」

山「ちょっと皆静かに」

桃「席は何処ですか」

山「窓際の一番後ろにある」

丁度俺の後ろだった。遠くの席の男子生徒の目線が怖かった。

男子「（ケツあいつの後ろか）」

数時間後、昼休み

「頂きます」

俺は遊び仲間の平野と岸田で食っていた。弁当箱はアルミ製で中はご飯と串カツとブロッコリーとベーコンを巻いたアスパラガスとグラタンだった。彼女は桃色の弁当箱にカツサンド2個とポテトサラダとイナゴの佃煮だった。

「（な、何じゃこりゃあああ）」

平「（弁当にイナゴの佃煮?）」

岸「（あり得ない）」

桃「?」（やっぱりイナゴの佃煮はまずかったわ）」

午後の授業が終わり、放課後

部活は入っていなかったので2人と帰った。

「部活無いっていいな」

その後二つに分かれた道で別れた。俺は右で2人は左の道へ行った。

「九十九?」

振り向くと彼女が居た。

そして俺の家の右隣の家に入って行った。俺の隣?

「ただいま」

家に入ってそう言った、俺の家は共働きだったので返事は無い。そして階段を上がり2階の自分の部屋に入った。中はドアの右の方に本棚があって、その隣に筆筒（引き出しは3つ）があった。

そして奥に黒いベッドがある。机は窓の前だった。そして彼女の2階の部屋の中が見えた。

「(やべえ着替えてる)」

彼女は上半身が桃色のキャミソールだけだった。俺はすぐ目を逸らし白いカーペットが敷いてある床に伏せた。

その後、夕食は母の作り置き豚の生姜焼きと白米を電子レンジで温め、鍋に入っている味噌汁をコンロで温めた物だった。

「(淋しい食卓だ)」

昔は母と父が居たのにな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4725ba/>

桃色の悪魔

2012年1月13日21時50分発行